



TITLE:

カメルーン東南部の農耕民バクエ
レにおける妖術をめぐる実践と語
り (Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

山口, 亮太

CITATION:

山口, 亮太. カメルーン東南部の農耕民バクエレにおける妖術をめぐる
実践と語り. 京都大学, 2016, 博士(地域研究)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19842>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	山口 亮太
論文題目	カメルーン東南部の農耕民バクエレにおける妖術をめぐる実践と語り		
(論文内容の要旨)			
<p>本研究は、カメルーン東南部に居住する農耕民バクエレ（Bakwele）の妖術とそれをめぐる語りの分析を通じて、妖術研究に新しい局面を開こうとするものである。</p> <p>第1章（序論）では、これまで人類学で積み重ねられてきた妖術研究のレビューがおこなわれている。そこには、妖術は社会的葛藤や緊張の徴候であり、最終的にはそれを解消するために存在するという機能主義的な立場と、妖術を語ることによる経験の組織化・物語化を重視する立場が存在している。しかし双方の立場において、妖術が立ち現れてくる現場は、きちんと分析されているとは言いがたい。本章で提示される事例においては、バクエレの妖術は必ずしも「望まれない」「悪い」ものではなく、また、妖術に対する告発がおこなわれない場合も多い。こういった状況で、なぜ複数の相容れない妖術解釈が延々と社会の中で生き続けているのか、というのが、本論文を貫く問題意識である。こういった問題を扱うため、本研究では二つの概念装置が用いられる。ひとつは杉島敬志によって提唱された「複ゲーム状況」論であり、そこでは、ある社会において、両立しえない規則－信念が同時並行的に作用している事態が分析される。もうひとつはエスノメソドロジストのM.ポルナーによる「リアリティ分離」の概念であり、「神の声を聞く人」と「聞かない人」の議論のように、世界についての複数の矛盾した経験が出現した場面が扱われている。両者は重複する部分も多いが、前者はどちらかというところ、「社会的な規則や信念」が併存している状況を記述しており、後者は「個人的な経験や知覚」に関する論争の場面が対象となっている。</p> <p>第2章では、調査地の概要が述べられた後、調査対象バクエレの移動と民族生成の歴史が詳述される。調査地であるカメルーン東南部は、ドイツ植民地期には、南に接していたフランス領赤道アフリカとの間で領有を争われた地域である。その中でバクエレは、ドイツとフランスの植民地政策や、カメルーン独立後の森林開発に翻弄され、紆余曲折をたどりながら現在の居住地であるジャー川流域に移動してきた。こうした移動の歴史が地域内の政治・経済的不均衡を生み出し、それが妖術に関する語りの背景をなしていることが指摘されている。</p> <p>第3章では、バクエレの妖術における中核的な概念である「エリエーブ」が分析される。エリエーブは持ち主の腹のなかに存在する「もの」であり、感染によって獲得され、夜中に身体から抜け出して活動する。持ち主にある種の力を与えるが、その力は必ずしも「邪悪な」ものではない。持ち主はエリエーブを「用いる」だけでなく、それに「命令される」こともある。このようにバクエレにおいては、妖術はその持ち主の身体と切り離すことができないことが指摘される。</p> <p>第4章では、病や体調不良の原因追及とその対処における、複ゲーム的な状況の事例が分析される。病が長期化・深刻化した事例において、その原因としての妖術、呪薬、悪魔術が持ちだされるが、その過程において当事者間で複数の相矛盾する物語が生起する。それらは衝</p>			

突し、さらには悪循環的に疑いを増幅するのだが、結局は複数の見解は収束しないまま、棚上げにされた状態が持続し並存するというありさまが記述されている。

第5章では、2010年に調査地近辺で行われた道路工事において、重機が故障したことによって発生した妖術騒動の録音データの分析がおこなわれる。道路沿い村長たちが一堂に会して、「道路（の建設）を止めた」とされる男性から聞き取りを行った。誰が・どのように道路を止めたのかに関する説明は何度も変転して論じられ、異なる妖術観をめぐるリアリティ分離が発生する。それは妖術をめぐるの絶対的な権威者が不在であることによると分析されるが、興味深いことに、杉島の言う「不定見者」たちのアドホックな解釈の果てに、議論の中から「道路の場所を左右する」という新しい妖術の概念が出現してきている。

第6章では、バクエレと同所的に居住するピグミー系狩猟採集民バカとバクエレ自身が、どのように自己および他者を表象しているのかについて分析がおこなわれる。これまで狩猟採集民－農耕民関係は、生業・生態的には相互依存ながら、双方が侮蔑し合うという「アンビバレントな共生関係」として描かれてきた。本章では、「バカはバクエレよりも強力な妖術を持っている」という、バクエレによるバカ表象から出発し、バカーバクエレ関係を、すれ違いながらも交渉を続ける「複ゲーム状況」として提示している。

第7章（討論）では、ここまでの分析のまとめとして、（1）善悪二元論的な妖術理解にとられない、妖術の多様性への着目が必要であること、（2）身体の一部であり、持ち主に命令するものとしての妖術という側面への探求がなおざりにされてきたこと、そして（3）妖術者が告発されず、複数の妖術の物語が並存する状況が常態であることの三点が指摘されている。そういった状況の中で、バクエレたちは、妖術を拒絶することもなく、複数の妖術観を並立させつつ、「妖術者とともに生きる」人々であると結論されている。

(論文審査の結果の要旨)

妖術は、人類学においては古典的と言える対象であり、これまでエヴァンズ=プリチャードのアザンデの事例をはじめとして、さまざまな研究が積み重ねられてきた。本論文の第1章にレビューされているように、かつては構造機能主義の潮流の中で、社会の葛藤とその回復のために存在するという妖術観が主流であった。この見方は最近の、近代化において妖術は捨て去られるのではなくむしろ興隆しているという「妖術のモダニティ論」においてもさながらに受け継がれている。一方、妖術の社会的機能ではなく、それをめぐる経験を分析し基礎づけるという方向が、浜本満らによって押し進められている。本論文は、これらの研究の有効性を認めつつも、妖術が生起する現場に帰り、そこで起こっている出来事を詳細に分析することによって、妖術に関する人類学的知見に新しい局面を開こうという試みである。

本論文は、カメルーン東南部に居住する農耕民バクエレを対象とするが、その妖術研究、人類学への貢献は、以下の3点にまとめられる。

第1は、研究の基礎をなす、バクエレの詳細な民族誌的記述である。まず、バクエレの民族生成 (ethnogenesis) の状況が、文献調査と聞き取りによって詳細に復元されている。バクエレは単一の起源を持たない混成集団的な民族であるが、このことが、本論文で分析される個人間、村落間のさまざまな軋轢の源となっていることが示される。次に、バクエレの持つ妖術である「エリエーブ」に関して、詳細な描写がなされる。エリエーブの著しい特徴は、持ち主がそれを使って「毎晩飛行機でパリへ行く」「金持ちになる」などのことが可能になったり、あるいはそのせいで「酒を飲みすぎる」といったように、必ずしも悪意や不運とは関係のないコンテキストでも現れるという点である。このように持ち主が意図してそれを使うことができるという意味で、エリエーブはエヴァンズ=プリチャードの分類における「呪術 magic」の性質をも併せ持つ観念である。バクエレ社会にはエリエーブを止める方法は存在せず、またエリエーブに関して最終的な判断を下す権威者もおらず、人々はエリエーブと共に生きていかざるを得ないのである。

第2は、妖術論における新しい視点を提供したことである。村に住み込んでの長期の参与観察と、エリエーブをめぐる議論の詳細な書き起こしによって、バクエレ社会には、「論理的には両立し得ない複数の観念の並存」という状況が普通に起こっていることが明らかにされた。このことを分析するため、杉島敬志が提唱する「複ゲーム状況」と、ポルナーによる「リアリティ分離」という二つの概念が用いられる。両者はよく似た概念ではあるが、「複ゲーム状況」は、当該社会の中に複数の相容れない規則や信念が併存している状況に対して用いられるのに対し、「リアリティ分離」は、典型的には対面状況にある二者の間で、個人的な経験や知覚のずれに関する論争がおこなわれているという状況を示している。本論文では、エリエーブに関わるいくつかの事例で、社会的には相容れない信念が並立しており、また相互行為においてはそれぞれの経験をめぐって争いが起こっている場面が分析されている。しかし、そこでの矛盾、軋轢は、いったんはエスカレートすることがあるものの、結局は根本的な解決のないままで終息し、あるいは棚上げされる。つまり

そこでは、従来の妖術論で言われる「社会的矛盾の解消」も「経験の組織化」も達成されてはおらず、人々はただ、「妖術者と共に生きていく」のである。

本論文の第3の貢献は、上記で得られた知見を、逆に「複ゲーム状況論」「リアリティ分離論」に投げ返す可能性の提示であろう。つまり、これら二つの概念は共に、「相容れない規則－信念は両立し得ないはずである」（が、実際は両立していることもある）、「リアリティは分離しないはずである」（が、実際は分離していることもある）、という形の立論である。しかし本論で示されたように、そういった状況は少なくともバクエレ社会では常態と言え、逆にそこから、「一つの社会の中で、規則－信念は単一であるべきだ」「リアリティと呼ばれるものは一つであるべきだ」といった前提を疑い、規則やリアリティといった概念そのものを再考する契機が生まれている。

以上のように、本論文は、長期にわたる綿密な現地調査を基盤として、妖術研究に新たな展開をもたらす意欲的な地域研究として高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年2月5日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。